

徳園  
活

徳園  
活

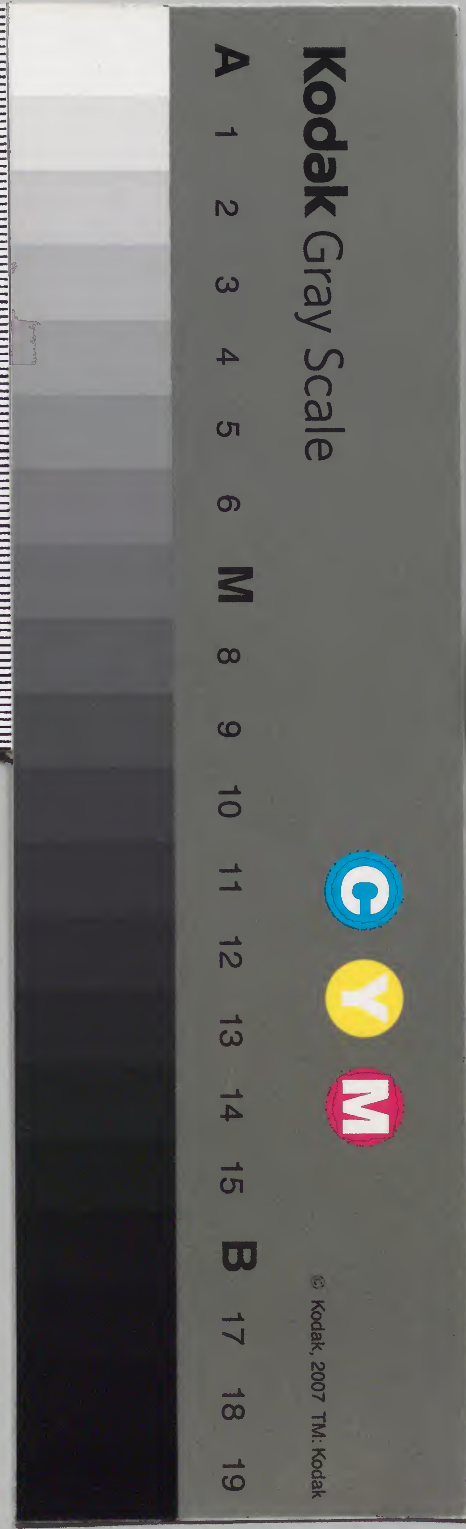
三

一

内閣文庫			
一九七	二七〇	和	
三架	一六二	書	
冊	號	類	

太政官文庫			
	一七〇	和	
一六	九八	書	
冊	函	門	

内閣文庫	
番號	和 11702
冊數	16 ( 11 )
函號	197 37





江州山田浦木内小繁先生著

法蘭西 石法 志 三編

三部六冊

此書は法蘭西の事ありて石法郷人の言傳つる事と拾ひ再  
法家政教の奇蹟及び小繁先生年表末条あり  
石法郷の事ありて法蘭西の事ありて  
此書考ふるべし  
浪華書林 興文堂蔵版

出

石法志三編之序

酒 松本文庫

般に云ふ所の國百木山田名

石法志三編とあり

己に云ふ所の書法

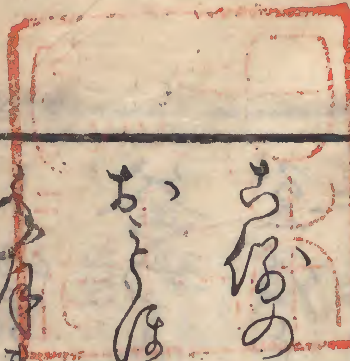
此書は石法の事ありて今もその名あり

石法の事ありて今もその名あり

石法の事ありて今もその名あり

石法の事ありて今もその名あり

石法の事ありて今もその名あり





この世もこの好む。徒の事なきに世に  
益あるもの。且い。信さるる。も  
互信。よ。た。あ。の。を。あ。は。れ。功。を  
も。は。の。く。の。あ。は。れ。あ。や。新。村。の。あ。郭。と  
い。信。さ。る。

享和元年辛酉の四月 宇治五十槻 久考

雲根志三編卷之一目錄

寵愛類 十五種

- 車折石 一
- 如意宝珠 三
- 湯玉石 五
- 岩之丸 七
- 辨慶石 九
- 富士石 十二
- 玉含石 十三
- 巖櫻 十五

- 名珠 二
- 玉鏡臺 四
- 井中得玉 六
- 信長腰掛石
- 得細石 十
- 貯水瑪瑙 十二
- 青珊瑚 十四



雲根志三編卷之一目錄終

雲根志三編卷之一

江州山田浦 木内小繁重曉著述

寵愛類

車折石

山城國下嵯峨は車折大明神と崇免を以て近世祈禱の者

宝殿は奇石に神納するの夥し雍州府志卷之三神社門

は曰櫻の宮は葛野郡下嵯峨に在り法系の初業の真人と云

とてりかり傳へ言龜山院嵐山初幸の日車駕此宮の前と云

たすよとき途中より石に駕す所を牛茲は於て地を臥て

進み行す供奉の人とれと怪しむ始て此宮にても所如

主上御車より下たすひ徒よりして仍たす茲より此石と



車前石と稱す今社の西宝珠院の門内あり一説は主  
上の所車より下關白の車なりと此説是より近き頼  
業ハ七代の侍讀として徳行大才美名を天下に施す今  
瘡と患う者斯社に詣て社邊の小石を拾ひて家へ返  
るとハ則其病果して瘡而後初拾ふところの石は又一箇  
の石と添て社に置斯邊清原家の采地として大井川  
の東南に伏原堤あり廢流伏原の稱號とれよと考す

名珠 二

山城の國嵯峨臨川寺の東五丁より鹿王院より後  
院あり傳へりしむしありよとの名珠あり夢窓國  
師の所持して水珠火珠寶珠なり火珠ハ臨川寺の

前より淵に沈む宝珠ハ地は掘り其地ハ今の角倉の宅地  
なり水珠ハ今尚院の什宝なりとぞ

如意宝珠 三

和州藤門周齋の説は本國法隆寺西門の前通に日里村  
に聖徳太子より傳へり内匠の家あり此人二十の歳  
世と捨て出家となりんやに約邪して希くハ我生涯  
小如意宝珠としてしよのをえせしめたまふと太子は約  
七十五日かり満す日大風雨震動して近村の山崩し  
大洪水あり其流を出了土砂の中より大さ雞卵むらりなる  
美玉と拾ひ得し人ありとて近里の村に群とがせ  
て此僧も此玉と乞見て心中に如意宝珠なりとぞ



此事の始終長談なり故に略す又元亨釋書に花  
山の法皇紀州那智山にあつひせられたりて三年おこりせ  
たしひけよ一日神龍降て如意宝珠と捧げた  
記せり大明一統志曰日本國阿蘇山石火起接天俗異  
而禱之有如意宝珠大如雞卵

玉鏡臺 四

紀伊國玉の浦きよのうらは玉鏡臺とたまがたありあり大石壁立して  
海岸に臨む此石中このいしに玄玉とくろたまあり大さ雞卵の如く先  
輝りあかりはあけず流るる美石なり夫木葉とふぎなり薩摩  
守忠度の歌よ  
こまけけ目新こまけけと玉の浦たまのうらのそがれ小島よ千きりなり

其外古歌多し此邊の人の物行ものゆきは同名同石ありの溪たによ  
あり又また有田郡名島村能仁寺の境内の大石もおおいしあり  
同郡須原村仙魚畏寺山大石中おおいしもありとありと皆里  
俗玉よこたまといふ予取得てとりよとありあけずあり并石家いしやよあり  
ゆあり石卵いしたまごの類なり

湯玉石 五

湯玉石ゆたましといふもの出羽の國米澤の近郷玉川の温泉おんせんより  
あり形麻實あまじ或ハ豆粒まめつぶのごとし色薄白うすしろくありて少すく  
黄色きいろと帯皺おびハありりて其形そのかたち甚雑おそろなり小細こさいのごとの  
とつとも奇物きぶつなり洛法泉寺らくほつせんの所藏しよざうして予よに教粒しやうりゅう  
とありふらありとあり



井中得玉 六

尾州津島氷室氏の寵玩の中より得てひきき携へ来り  
予よ示して云同國名古屋の人新井と堀土中と穿  
ると犬餘して此物と得て其奇品なりか自ら自  
然して赤く大さ拳のびり赤色玲瓏して光  
輝り津輕瑪瑙のれして又異なり琥珀に似て硬  
く重し實は弄石家の寵玩なり西陽雜俎曰楚州  
僧智一掘井得赤玉和漢月日の談なり  
巖之丸七  
形糸して色青黒く或ハ長く或ハ平なり小なりハ胡  
挑のごとく大なりハ毬のごとく肌滑して石質堅く

数顆塊となり或ハ獨壁立のごとき大岩中より  
おなり石卵に似て別種のものなり江州鮎川山にてこれ  
と相つ何れのものかと辨へしす里俗岩の丸  
とよ好事の者石肝といふ又攝州箕尾勢州榑原佐  
渡船川等も名類異して同質の物ありて按ず  
よ本草に説くところの薑石のれなりんり

信長腰掛石 八

織田軍記に曰此時信長公東坂本の大鳥居村のすく  
よ攻上らせしひけし山門の中表金剛相摸といひ  
そ双の大力強ちよて如意が嶽より袖ひす大  
の矢とひやと放つ其矢信長公の召進し馬の太



腹中より歩馬を只一矢に倒し死す信長公より遊より  
 大鳥居の石上より腰と掛居直したる相模坊二の矢  
 と放り其腰掛たる石の中て石はちちち砕けりその  
 鏝の長さ一尺二寸大佛殿の宝藏に籠れ其石今も  
 大鳥居の側より見ると近比坂なりて此石は  
 大鳥居の側より見るとて畷山の登り口栗坂より見ると  
 此邊の古老より信長公此栗坂より腰掛たると相  
 模坊八王寺の嶽より射ると此説尤可なり彼如意が  
 嶽より大鳥居まで八道法一里あり今相模坊より一者  
 於あり其子孫有り  
 辨慶石 九



得網石 十

山城國矢瀨の里天満宮の鳥居の傍にあり大石是なり  
 里人傳へり辨慶戲は畷山より提来り此石置と  
 又湖西坂本も弁慶の荷ひ石なり其の里俗傳へ  
 り辨慶は石也此石を荷ひあくるはと大石  
 二川の右より又伊賀の名張郡築瀬川の傍に弁慶  
 カ石とよみのあり  
 美作の國生津江見氏某常は盃石を求むの意を  
 夏日江に遊び網をもちてそとす一川の盃石は  
 ほとり大さ五七寸其姿まじく富士が三の峰よ  
 雪肌戴き側一の峯あり玉師の琢磨極くす



天工の産物益山石の最上なり予は其記と乞ふ且海内の  
諸彦は詩歌連誦の物とらふ又帝都西山は何似和尚の  
人ありてその時加茂川は細くして硯一面とわたりての硯  
甚古雅なり數百年石則は天工の如く裏は宝龜  
の文字幽々として洛の窮樂道人は傳はるる道  
人滅後天龍寺賢長老の秘玩なり其後火災は燒失す  
と唐闕史曰予李友江は細くして終は拳とよりなり石  
と得たり日増長し半月と経く重きも四十斤と  
又豫章記曰顯慶四年漢人細くして奇石と得たりこれと  
擊ハ鼓の如く其聲百里は聞ゆ

富士石 十一

巴酉の歲六月四日越後高田光國寺窓吟坊の茶話  
に信州保科は富士権現と信仰す人あり明和五年正  
月同州高井郡神代圓徳寺より年始の使あり主人暫  
時外用あり彼使僧玄関は休息し庭前をなめ  
居るは玄関の軒下は雙びし石ひとつの堀出しは  
んねりしよりこれ石匠士のねり彷彿たりやと庭  
ては取上りて似たり座敷は持とて  
弄し居たりも主人用ひ畢て使僧は逢應對淋てな  
使僧あつきの物にす主人大に驚き思ひ顔色  
よく謹て其石我等は附属しはし使僧笑みて  
よ貴公の庭前の石なり何うさやの慇懃及むん





浪舟桃溪園  
 福  
 禪



やけき貴家の宝物たまたま主人又り少一子細のい  
 へを何ふ貴僧より此石を我等へ傳ふ下さるべきよりの  
 詞は私にたりと使僧よりは進上りべきよりと答ふ  
 此時主人敬し拜し頂戴しやう座上りよと  
 使僧はむくひてり不思議とやうんを遊しとやうん  
 我等富士権現と信仰すり三十餘年なる前夜の夢  
 は黒衣の僧來りて富士権現より沙よぬ紙ゆり謹て受  
 けしひく一川の石を授けたるて夢よぬ今も  
 其授けしたまひし石はまさしく此石なり又夢よ  
 ぬところの僧の形も貴僧と異なりと云語マ  
 しらん

貯水瑪瑙 十二

水貯り馮泓ハ奥州津輕の産して赤色或ハ斑文の  
 馮泓にして大さ桃栗むらり自然石なり透徹  
 鮮明石中空虚にして水と貯み水中豆粒むらり  
 淡眼あり上下す實は赤石中の奇あり愛玩  
 する堪り浪華本教寺の沅沅帝都島田氏の秘  
 玩事もあり又備中の岡田氏が松前津輕より見しハ  
 大さ掌のぐぐ枕のぐぐりつ

王含石 十三

越前國今庄中屋平ハある隣家の親類ハ王屋  
 平四郎よりしのある王含石より奇石を持て古今



魚類の珍石なり大きき一重に四貫目餘  
真丸なり玄石なり片端は飯器の大きき黒色糸は  
の美石然る色漆のぶて光輝は半  
ハ石は含み其黒玉の頭三川は開き破るの中は窺ひ  
了る石中は大きき拳の如く雪白く真丸なる玉は  
外の皮ハ柘榴の實のえめぐ産所詳ならず此  
家代々持傳へて宝とす卒尔は他の人へ了るは  
ゆきす

青玉樹 十四

伊賀國上野瀧本氏 笑石亭 多幸弄石の友なり集  
蓄する奇石数百品の中は房州の海底より得るもの

玉樹一株あり長さ四寸餘肌滑く教條ありて石質  
堅剛青黄色根は白玉の座ありて全體魚鱗なり予が  
蓄する所の玉樹石樹の及び他家に藏る玉樹の如  
ゆきす尤愛す



根は白玉の座なり

珊瑚ハ枝ぶて大異なり

巖櫻 十五

伊賀志伊賀郡神戶村和歌山の里は山根の  
方一丈餘の大石なり石上は土砂草木なく根の大

物體珊瑚の  
筋あり



木の株生茂りて往古よりかたじけなく今此来由

かたじけなく天武天皇大友の皇子と伊賀とありし

たけふり時天白王芳野より伊賀治まよもひきたし

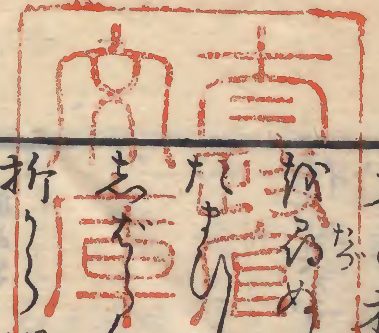
志をく此和歌山の里岩橋の石上よりやまひの

折し標花散て白糸威の伊賀長よりうきれより

軍より利をむかひし伊賀よりうきれきたしはこれと祝

して伊賀威より鎧をゆらせたまふよめく伊賀威と

もよ移り事ハ永閑記よ詳なり



雲根志三編卷之一終



